

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24年 5月 28日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520078

研究課題名（和文） ペラギウス派神学の起源とオリゲネス主義からの影響に関する文献学的・思想史的研究

研究課題名（英文） Philological and Ideological Study on Origin of Pelagian Theology and Influence from Origenism

研究代表者

山田 望 (YAMADA NOZOMU)

南山大学・総合政策学部・教授

研究者番号：70279967

研究成果の概要（和文）：ペラギウス派の思想史的起源は、アクイレイアのルフィーンヌスによるオリゲネス、バシレイオス、エヴァグリオスらのラテン語訳、さらにペラギウス派のキーワードである「キリストの模範と模倣」の概念においては、ルフィーンヌスの前任者であったアクイレイアのクロマチウスによる著作からの影響のあることが判明した。これらアクイレイア司教たちの手による翻訳や著作に、オリゲネス主義者として知られるエヴァグリオスやオリゲネスの影響を決定的に受けていたバシレイオスの著作も含まれることから、オリゲネス主義が思想史的起源ではないかとの当初の仮説が証明されたと結論づけることができる。

研究成果の概要（英文）： Through the investigation about the origin of the Pelagian Thoughts in this research, it stands out in relief that Aquileians, namely Rufinus of Aquileia and Chromatius of Aquileia, had definite influences through their writing and translation of works on Pelagian Thoughts, particularly their monastic key concepts. The concept of 'exemplum Christi' played one of the most important roles for Pelagian monastic practices. We can not deny the high possibility that Pelagius learned this concept also from several sermons and tracts of Chromatius of Aquileia. Concerning 'sapientia' mediated by the Holy Spirit, we can indicate the same notions in the works of St. Basil. Rufinus of Aquileia translated several main works of St. Basil, from which Pelagians adopted this notion. Rufinus of Aquileia translated 'Sententiae' of Evagrius, in which we can recognize many resources of Pelagian usage concerning 'imperturbabilitas'. From these researches on the origin of Pelagian Thoughts and Pelagianism, we can conclude that the Latin translations from the Greek works of Basil, Evagrius and Origen by Rufinus of Aquileia and the sermons and tracts of Chromatius of Aquileia played the definitely important role as the origin of Pelagian Thought and Pelagianism.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学、西洋思想史、西洋史、キリスト教教理史
科研費の分科・細目：哲学・思想史
キーワード：古代キリスト教思想

1. 研究開始当初の背景

西洋思想史においてペラギウス主義と言えば、アウグスティヌスの論敵として原罪や神からの恵みの絶対性を否定し、他方、人間の自由意思の働きを強調し、恩恵がなくとも人は自力で救いに到達できると主張したペラギウス派のストア的功績主義であるとの定義が通説となってきた。しかしここ20年程の間にペラギウス研究は格段に進み、とりわけペラギウス自身は、ペラギウス主義として一般に定着した、恩恵なしに自力で救いに到達できるとの極論を主張したことは一度もなく、むしろ神の恩恵の必要性を十分に強調し、その恩恵と人間の自由意志との協働により救いに到達できるという、東方神学において一般的な神人協働説の立場を取っていたことが明らかとなった。

しかしながら、肝心の、果たしてペラギウス自身やペラギウス派神学の本来の起源はどこにあったのかについては、ほとんど研究が進んでいないのが現状である。間接的にオリゲネスからの影響が認められることはすでに周知のこととなりつつあるが、では、3世紀のオリゲネス神学のその後の多様な展開の中でも、どのような流れを、実際にいかなる経緯でペラギウスやペラギウス派が受け継いだのかについては、未だほとんど手がつけられてこなかった。

その一方で、本研究者は、先立つ研究により、4世紀末のローマにおいてオリゲネス主義を巡って対立したルフィヌスとヒエロニムスという二つの陣営が存在したこと、また、双方の陣営は、次の世代に生じたペラギウスとアウグスティヌスとの対立、すなわちペラギウス論争の二つの陣営とそれぞれの人脈の上で繋がりがあつたことを既に突き止めていた。この人脈上の繋がりに、これまで全く別個の異なる論争としてしか扱われてこなかったオリゲネス主義とペラギウス派の思想とは、実は文献の上でも思想の上でも深い関連があるのではないかとこの着想を、本研究者は強く意識するようになった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、アウグスティヌスとの論争に敗れ、西方教会最大の異端と見なされるに至ったペラギウスならびにペラギウス派神学の思想史的起源は、4世紀のオリゲネス主義神学の中でも特にエヴァグリオスやルフィヌスに代表される一連のオリゲネス主義にあるのではないかとこの仮説テーゼを立て、これを可能な限り検証しようというも

のである。

以上の研究目的を果たすための、より前段階の目的として、以下の小目的を設定して研究を進めた。まず、エヴァグリオス、ルフィヌス、ペラギウスの思想史的関連の前提となる歴史的事実関係を確認、確定しておくことが第一の目標であった。その際、ルフィヌスやペラギウスの人脈と大きな関わりを持った大メラニア、パンマキウス、ヒエロニムスといった人物との伝記的・時系列的な事実関係にも注目した。

次の段階として、上記の歴史的事実関係の確認を基に、それぞれの人物たちの中で交わされた書簡や、それぞれの著作間に思想史的依存関係や影響関係が見られるか否かという、より本質的な文献研究が第二の目的であった。この段階で、本研究者は、当時、在外研究を行っていたローマのアウグスティヌス教父学研究所において、アクイレアのルフィヌスのみならず、その前任司教であったアクイレアのクロマティウスの著作や思想も、本研究の対象とすべきであることに気づいた。アウグスティヌス教父学研究所での在外研究を終えて帰国し、2011年に開催された英国オクスフォードでの国際教父学会に備えて研究を整える段階では、ペラギウス派の思想史的起源として、アクイレアのルフィヌスとアクイレアのクロマティウスという二人のアクイレア司教の存在が、重要な役割を果たしていたことはほぼ間違いないこと、これらアクイレアの思想家たちの著書やオリゲネス主義者の手になる文献からの翻訳書とペラギウス派の著書との思想的関連を解明することが本科学研究後半における具体的な目標となった。

3. 研究の方法

以上の研究目的遂行のためには、まず、エヴァグリオス、ルフィヌス、ペラギウスとその弟子たちに関する、思想史的関連の前提となる歴史的事実関係を確認、確定しておく必要があつた。その上で、ペラギウスやペラギウス派は、ルフィヌスやエヴァグリオスの思想をどの文献からどのように継承したと考えられるのか、文献学的、思想史的関連を検証する必要があつた。こうした検証を積み重ねることによって、最終的には、ペラギウス派の思想史的起源は、彼ら独自の異端の見解そのものにあつたというよりはむしろ、既に存在していたアクイレアのルフィヌスやエヴァグリオスをはじめとするオリゲネス主義者の思想であつたとの仮説テー

ゼの検証を当面の目標と定めた。文献学的には単語レベルでの依存関係を検証し、思想的には、恩恵論や神人協働論における依存関係や類似性が確認できるかどうか、類型論的・構造主義的検証方法を採用した。

より詳細な研究の手順として、ペラギウスやペラギウスの弟子たちと繋がりがあった人脈の中で、その主だった主要人物の手になる文献とペラギウス派文献との依存関係を、ペラギウス派が良く用いていたキーワードを手がかりに検証していく方法を取った。ペラギウス派人脈の主要人物として、ローマ貴族出身の大メラーニアとアクイレアのルフィヌス、そしてエヴァグリオスを挙げる事ができる。これら三者はペラギウスやペラギウス派と共に一括りにされ、自由意志の働きを弁護し、かつアパセイア(ギリシャ語。ラテン語訳として、*impassibilitas* や *imperturbabilitas* が用いられる。)を強調した廉でヒエロニムスから非難されていた。

さらに、アクイレアのルフィヌスがギリシャ語からラテン語へ翻訳した、オリゲネス、エヴァグリオス、ナチアンゾスのグレゴリオス、大バシレイオスらの訳書とペラギウス派文献との間に何らかの依存関係が見られないか否かを精緻に検証していった。その際にも、ペラギウス派に典型的と言われるキーコンセプトと同じ、あるいは類似した概念が用いられていないかどうか、という点を中心に検証を進めていった。キーコンセプトとしては、ペラギウスやペラギウス派が再三に亘って展開させている、「キリストの模範」あるいは、「模範と模倣」の対概念、「知恵」の媒介としての「聖霊」の働き、とりわけ、その際の「知恵」に関する二重の理解、すなわち、神からの超越的「知恵」と、人間に内在する人間の属性としての「知恵」の理解である。さらに、ヒエロニムスから非難された「アパセイア」の概念に関する依存、類似関係についても検証の対象となった。

その結果、「知恵」をもたらす聖霊理解に関しては、アクイレアのルフィヌスが翻訳していた大バシレイオスの著書や思想との依存関係が明らかに見られることが判明した。ペラギウス派も大バシレイオスも、「知恵」の両義的性格を強調していたからである。また、「アパセイア」については、エヴァグリオスの文献との依存関係が確認された。

最後に、本研究者は、本科研費を受けた初年度、本務校からの派遣により、ヴァチカンの教皇庁立アウグスティニアヌム教父学研究所で在外研究を行うというまたとない好機に恵まれたが、以上の新たな知見は、いずれも本研究所における研究から手掛かりを得たものであった。さらに、本研究所での研究の際、上記、キーワードの内、最も重要な「キリストの模範」、「模範と模倣」の概念

を、アクイレアのルフィヌスの前任司教であったアクイレアのクロマチウスの著作から受け継いだのではないかと、この研究所での研究においてであった。そして、紛れもなくペラギウス派のこれらのコンセプトを、彼らに先立ってクロマチウスが再三に亘って繰り返していたことが確かめられたことから、両者には確実に依存関係のあったことが明らかとなった。

4. 研究成果

本研究により、ペラギウス派の思想的起源が、先行して問題となっていたオリゲネス主義にあるのではないかと、との仮説テーゼは、アクイレアの司教であったルフィヌスやアクイレアのクロマチウスらの手になる翻訳書や著書とペラギウス派のキーワードとの依存関係が証拠として示されたことにより、もはや仮説ではなく、疑いのないテーゼとして成立することが論証された。

オリゲネス主義者として知られるエヴァグリオスとペラギウス派との関連は、直接的な影響関係というよりも、アクイレアのルフィヌスによる翻訳を媒介とした関連であること、さらに、ルフィヌスがギリシャ語からラテン語に翻訳したバシレイオスの主要著書ならびにナチアンゾスのグレゴリオスの翻訳書とペラギウス派との関連が重要であることが明らかとなった。

さらに、アクイレアのルフィヌスのいけば先輩で前任司教であったアクイレアのクロマチウスとペラギウス派との関連も新たに明らかとなった。とりわけ、ペラギウス派文書に特徴的な、「キリストの模範」や「模範と模倣」という一連の概念群がペラギウス派に先立つアクイレアのクロマチウスの諸文書の中でも繰り返し用いられていたことは、ペラギウス派が、このクロマチウスからも多大な影響を与えられていたことを十分に示すものと言える。

アクイレアのクロマチウスは、これまでペラギウス主義とは無関係であると思われてきたが、その著作にみられる「キリストの模範」、「キリストの模倣」、さらには諸聖人や聖書に登場する人物たちの模範と模倣という概念の使用法と内容は、疑いなくペラギウス派の同概念の使用法や内容と酷似していることが明らかとなった。本研究者は、クロマチウスの著作から 30 例以上の同概念の用法と、ペラギウス派の著作からの 70 例以上の同概念の用法とを比較した結果、もはや両者において本概念における影響・依存関係を否定することはできないとの結論に達した。

2011 年 8 月に英国オクスフォード大学で開催された国際教父学学会において、本研究者は、以上の研究成果について発表を行った。

その際には、アクイレシアのルフィヌス、アクイレシアのクロマチウスという二人のアクイレシア司教の翻訳・著作から、ペラギウスならびにペラギウス派が、「*Exemplum Christi* (キリストの模範)」、「*Sapientia*(知恵)」、「*imperturbabilitas* (不受動心)」といったキーワードとその解釈を受け継いでいたとの見解を、各々の文献学的テキストレベルでの例証を示しながら論証した。4年に一度開催される本国際学会において、奇しくも、イタリアのパドバ大学から参加した **Pier Franco Beatrice** 教授が、アクイレシアのクロマチウスがディオスポリス司教会議においてペラギウスを弁護する発言を行っていたとの梗概を発表し、これは本研究者の見解を歴史的に裏づける事象となり、かつまた逆に、私の発表内容が **Beatrice** 教授の発見を文献レベルで裏づけるものともなり、国際学会の席上できわめて注目される事態となった。本研究者の研究成果が、国際学会のレベルでも認知される結果となった。なお、本学会での発表は、2013年度出版予定の学会誌『*Studia Patristica*』に掲載されることが既に決定済みである。

クロマチウスとの依存関係のみならず、バシレイオスとエヴァグリオスとの関連も明らかになったことは、ペラギウス派の思想史的起源として、これらオリゲネス主義者からの影響をペラギウス派が受け継いでいたことを裏付ける結果となった。バシレイオスとの関連では、とりわけ、その聖霊理解における二面性の特徴、すなわち聖霊が神からの超越的な知恵の働きを媒介すると同時に、人間に内在する知恵の理解力にも働きかけるという二面性を、バシレイオスもペラギウスも受け継いでいることが明らかとなった。さらに、エヴァグリオスとの関連では、エヴァグリオスが頻りに用いたアバセア(不受動心)という概念を、エヴァグリオスもペラギウス派も、本来のストア的な意味においてではなく、むしろペリパトス派が用いていたメトリオパセア(中庸を求める感情の制御)の意味で用いていた点できわめて類似していることが明らかとなった。

以上の研究結果により、ペラギウス派の主要な思想史的起源として、アクイレシアのルフィヌスならびにアクイレシアのクロマチウスらの著作と、さらにルフィヌスによるオリゲネス主義者たちの著書の翻訳が指摘できることが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計5件)

- ① **Nozomu YAMADA**, “Origin of Pelagian Monastic Ethos: ‘*exemplum Christi*’, ‘*sapientia*’ and ‘*imperturbabilitas*’”, *Studia Patristica*, 2013 査読あり, 掲載決定

- ② **山田 望**「世俗化した教会の制度化と権威主義化に抗して-ペラギウス派修道倫理の影響力と挫折-」『キリスト教史学』, 査読有り, 第65集, 2011年, pp. 41-58.

- ③ **山田 望**「西方教会の『構造』転換-ペラギウス派の思想史的起源を手がかりに-」, 『宣教学ジャーナル』, 査読有り, 第5号, 2011年, pp. 81-97.

- ④ **山田 望**「ペラギウスとアウグスティヌスにおける洗礼・聖霊理解の相違を巡って-三本論文(『キリスト教史学』第62集所収)の拙著言及への応答として-」, 『キリスト教史学』, 査読有り, 第64集, 2010年, pp. 172-196.

- ⑤ **山田 望**「エヴァグリオス修道神学の西方伝播に関する歴史的検証-ルフィヌスおよびペラギウス派の人脈を中心に-」, 『アカデミア』人文・社会科学編, 査読無し, 第87号, 2008年, pp. 155-187.

[学会発表] (計4件)

- ① **Nozomu YAMADA**, “Origin of Pelagian Monastic Ethos: ‘*exemplum Christi*’, ‘*sapientia*’ and ‘*imperturbabilitas*’”, The XIV International Conference on Patristic Studies, Oxford University, August, 2011.

- ② **山田 望**「ペラギウスとアウグスティヌスにおける洗礼・聖霊理解の相違を巡って-三本論文(『キリスト教史学』第62集所収)の拙著言及への応答として-」, キリスト教史学会, 2010年, 11月21日, 国際基督教学会。

- ③ **山田 望**「世俗化した教会の制度化と権威主義化に抗して-ペラギウス派修道倫理の影響力と挫折-」キリスト教史学会, 2010年9月10日, 宮城学院大学。

- ④ **山田 望**「西方教会の『構造』転換-ペラギウス派の思想史的起源を手がかりに-」, 日本宣教会, 2010年, 6月26日, 清泉女子大学。

[その他]

XIV International Conference on Patristic Studies ホームページ:

<http://oxfordpatristics.blogspot.jp/2011/07/nozomu-yamada-origin-of-pelagian.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 望 (YAMADA NOZOMU)

南山大学・総合政策学部・教授

研究者番号: 70279967